

初期伊万里焼

秀吉の朝鮮出兵で生まれた初の国産磁器



出土遺跡 波多江遺跡

伊万里焼は佐賀県有田町を中心とする地域で生産された磁器の総称で、有田や三川内、波佐見などの製品が含まれています。製品の主な積み出し港が伊万里であったことから「伊万里焼」と呼ばれました。

伊万里焼は、佐賀藩の藩祖鍋島直茂が、豊臣秀吉の朝鮮出兵（1592・1598年）の際に、連れ帰った李参平をはじめとする朝鮮人陶工を中心に有田で磁器の製造に成功したのが始まりと考えられています。

伊万里焼の中でも、江戸時代初頭の1610年代から1630年代頃までの初期の製品は特に「初期伊万里」と呼ばれています。初期伊万里は白地に藍色のみで文様を表した「染付」がほとんどで、文様は中国の磁器を真似した素朴な絵柄が多く見られます。釉薬がたっぷりとのせられて厚ぼったく、絵付けの前に素焼を行わなかったため、大半の器には、釉薬を塗るときについた指跡が残っています。また、内底と外底には重ね焼きした時にくっつくのを防ぐために重ねる部分に挟んだ砂が付着するという特徴があります。これより後の製品には、技術が進歩したためこうした特徴が無くなりますが、骨董の世界では「古拙の美」として珍重されています。

初期伊万里は出土数が少なく、波多江遺跡は糸島地方の有力者である波多江氏に関する屋敷跡と考えられています。

下線の付く言葉の解説は裏面にあります



3－1 各地でゾクゾク生産！特産陶磁器

①

鍋島直茂

佐賀の戦国大名 龍造寺^{りゅうぞうじ} 氏の家臣で、龍造寺隆信から信任を受け、佐賀市大和町の 今山^{いまやま} の戦いで来襲した大友氏を破り、宿敵の少貳氏を滅ぼし、有馬^{ありま} 氏・大村氏を屈服させるなどの功績を挙げ、柳川の 蒲池^{かまち} 氏が滅亡した後の筑後国の国政を任されました。島津氏の侵攻を受けた 沖田^{おきたなわて} 畷の戦いでは龍造寺家を滅亡の淵から救いました。

豊臣秀吉の九州征伐の際にはいち早く随行し、朝鮮出兵にも龍造寺家臣団をまとめて従軍しており、豊臣秀吉からは越後の上杉家臣の 直江兼統^{なえかねつぐ} や備前の毛利家 小早川隆景^{こばやかわたかかげ} と並び称されるほど高く評価され、佐賀藩の国政を担うよう命じられました。

李参平

伊万里焼の始まりについては、鍋島直茂が日本に連れ帰った陶工の一人の李参平が、1616年に有田東部に原料となる磁石を発見し、日本で初めて磁器を作ったという説話が有名です。李参平は「陶祖」として、有田の陶山神社に応神天皇・「藩祖」鍋島直茂とともに祭神とされ、毎年陶器市に合わせて「陶祖祭」が行われています。日本名は金ヶ江 三兵衛といい、現在も直系の子孫が作陶活動などを行っています。

考古学的な調査では、1610年代前半から有田の西部で磁器試作・作陶が始められていることがわかっています。しかしながら、有田焼の生産と発展には李参平をはじめとする朝鮮出身陶工が大きな役割を果たしたことはまちがいありません。

波多江氏

糸島地方の戦国武将原田氏の一族で、戦国時代には原田家の重臣として活躍しました。豊臣秀吉の九州征伐により原田氏が没落すると帰農し、庄屋になったとされています。

糸島市の池田井田遺跡の発掘調査では、幅約4.5m、深さ0.8～1mの水堀を持つ15世紀頃の館跡が発見されており、その南約600mに築城年代はわかりませんが波多江氏によって築かれたと云われる波多江丹波^{たんばのかみ} 守屋敷跡があることから、波多江一族の屋敷跡の1つと考えられています。

波多江氏については、発掘調査報告書下巻の『波多江地区史料調査報告』に詳しく掲載されています。

参考文献：前原市教育委員会2006『池田井田遺跡』前原市文化財調査報告書第91集
福岡県教育委員会1982『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第6集』

写真：当館撮影

古唐津の小瓶・水差し

糸島の武将 波多江一族の遺跡出土品



出土遺跡 はたえいせき 波多江遺跡

唐津焼とは佐賀県東部・長崎県北部で作られた陶器の一般的な総称です。唐津焼の始まりは、豊臣秀吉の朝鮮出兵（1592・1598年）の際に朝鮮半島から連れ帰られた陶工たちが技術を伝え、開窯したというのが通説でしたが、研究の結果、朝鮮出兵以前の1580年代に唐津市北波多地方で領主波多氏の保護の下で朝鮮の陶工たちが生産を始め、波多氏が文禄3（1594）年に豊臣秀吉から改易されると朝鮮陶工も離散し、その一部が伊万里や武雄に定着して窯を開いたと考えられています。

朝鮮出兵によって連れ帰られた多くの朝鮮人陶工は、肥前各地で窯を開くとともに唐津焼の技術を向上させ、「一楽二萩三唐津」などと格付けされるほどの茶の湯の名品を生み出しました。

古唐津は粗くざっくりしていながら引き締まった土味と渋い釉の色からくる、素朴さ、温かさ、力強さが魅力となっています。

下線の付く言葉の解説は裏面にあります



3-1 各地でゾクゾク生産！特産陶磁器

②

波多氏

長崎県松浦地方で活躍した上松浦^{かみまつら}党の最大の一族で、波多興^{はたこう}の代には周防の大内氏と同盟を結び、島原の有馬氏、潮見の渋江氏、平戸の松浦氏ら近隣の豪族と友好関係を保って、肥前の戦国大名としての地位を築き上げました。波多親^{はたちかし}の代には豊臣秀吉の朝鮮出兵に従軍しましたが、戦い方を非難されて改易となり没落しました。

朝鮮人陶工

豊臣秀吉は、文禄元（1592）年と慶長2（1597）年の二回に渡って朝鮮半島へ出兵しますが、その際に従軍した西日本の戦国武将は朝鮮国の多くの陶工を日本に連れ帰り、焼き物の生産に従事させました。このときに新たに生まれたり技術が向上した焼き物が、佐賀県の唐津焼・有田焼、山口県の萩焼、鹿児島県の薩摩焼、福岡県の^{あがの}上野焼・高取焼などで、これ以降国内の窯業は飛躍的に発展しました。

朝鮮人陶工は手厚い待遇を受けていたため、朝鮮出兵で日本に連れ去られた捕虜を朝鮮に連れ帰ることを主目的とした朝鮮通信使が来た時には、儒学者はほとんどが帰国したのに陶工の多くは日本に留まったとされています。



藁灰^{わら}釉がたっぷり掛けられた温かみのある小瓶で、胴下部には釉薬を掛けず土の茶色を残し、白磁のような釉の白さを映えさせています。



丸形のかわいらしい水指で、渋い色合いの飴釉に窯内で自然に生まれた斑の濃淡が景色になっています。

参考文献：福岡県教育委員会1982『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第6集』

写真：当館撮影

古高取の茶道具

黒田長政が焼かせた茶陶



出土遺跡 ^{うちがそ}内ヶ磯窯跡

高取焼は文禄・慶長の役（1592・1598年）の際に黒田長政の命を受けた後藤又兵衛の家人によって日本に連れてこられた朝鮮人陶工が、1606年に直方市鷹取山麓に窯を築いたのが始まりとされています。朝鮮人陶工の技術を基盤にして、唐津焼の陶工を招き、有名な茶陶デザイナーの小堀政一（^{えんしゅう}遠州）の指導を受けるなどして作風の幅を広げ、「7色の釉薬」といわれるほど多くの釉薬を使うようになりました。

^{うちがそ}内ヶ磯窯は 1614 年に福知山麓に移転したものです。内ヶ磯窯の後には、山田市、飯塚市と窯を移し、1665 年に東峰村小石原に移転した窯は現在の小石原焼として定着し、福岡城下の福岡市早良区に移転した窯は現在も高取焼として継承されています。内ヶ磯窯では日用品以外に茶道に使う道具（茶陶）も焼かれており、発掘調査の結果、茶道の世界で唐津焼の名品と伝えられたものの中には内ヶ磯窯の製品が含まれていたことがわかり、優れた製品が生み出されていたことが明らかになりました。

安土桃山時代に千利休によって完成した茶道は、織田信長の影響もあり戦国武将にとって必須の教養となっていました。内ヶ磯窯で茶陶が大量に作られたことは、黒田長政が茶陶の重要性を理解していたことを示しています。

下線の付く言葉の解説は裏面にあります



3-1 各地でゾクゾク生産！特産陶磁器

③



藁^{わら}灰釉が胴中位までかかる「斑^{まだら}唐津」に似せた茶碗で、精製されたキメ細やかな素地と、その鉄分の多い土味が藁灰釉の白さを際立たせています。



藁^{わら}灰釉を内面まで掛けられた温かみのある小壺で、茶入れとして使うものでしょう。茶入れに藁灰釉を使うだけでなく、形態も独創的で、出土数が少ないことから試作的な製品だったのではないのでしょうか。茶入であれば蓋は象牙など陶器製でないものを使いますが、セットになりそうな蓋もあります。



藁^{わら}灰釉がたっぷり掛けられた温かみのある小瓶で、一輪挿し^{いちりんざし}にすると白磁のような釉の白さに葉の緑と花の色が映えることでしょう。

参考文献：福岡県教育委員会2001『内ヶ磯窯跡1』福岡県埋蔵文化財調査報告書第163集
福岡県教育委員会2002『内ヶ磯窯跡2』福岡県埋蔵文化財調査報告書第170集
福岡県教育委員会2003『内ヶ磯窯跡3』福岡県埋蔵文化財調査報告書第181集

写真：当館撮影